

境界への問いからオンガク観を形成する —「合う・合わない」ということの様々な感じ方から—

梅比良 麻子

1 「合う・合わない」について

教育芸術社『小学生の音楽2』の最後に掲載されている題材「みんなで あわせて 楽しもう」では、手拍子と歌が合う、互いの声が合う、異なる音やリズムによるパートを重ねることで合う等、様々な「合う」を含んでいる。これらの「合う」の例を詳しくいえば、旋律と旋律の隙間に合いの手のようにしてタイミングよく手拍子が入ることの粹な感じ、互いの声の音高や質感がそろうことによる一体感、低い音と高い音の音量のバランスや和声の調和という意味の美しさ等の「合う」であろうか。この「合う」ことの感じ方に正解はなく、音楽における「合う」については、それぞれの感性を働かせる余地が多分にある。この点に学習としての価値を置き、本質的な問いを「合うってどんな感じ?」と設定した。「合う」を問うことは、合うことと合わないことの境界を問うことであり、あえて境界を引いて考えさせることで様々な合うことの質感を出させ、各々のオンガク観を形成させたいと考えた。

2 授業の構想

(1)題材「合うってどんな感じ?—パートナーソングで歌ってみよう—」第二学年

年度末に行った本実践では「はるがきた」と「はるのまきば」のパートナーソングを教材とした。その理由は、常時活動等で行っていた簡単な既習曲を使った輪唱では、声の調和よりも、おいかけっこの楽しさ、もしくは音としては混沌としながらもつらねずに歌うことに成功した楽しさに向かってしまったことに対する指導者の反省が大きい。また、単に合奏にしなかった理由は、これまでに歌と楽器等で異なるリズムが合わさることの気持ちよさと友達と合わせることの難しさを経験してきた子ども達にとって、年度末の時期に再び合奏の学習を行うことは、以前の学びの繰り返しになると危惧したからである。そこで本題材では、三年生で行う声の重なる学習に向かう発展的学習という位置づけで、パートナーソングを教材とし、何がどのように合っていれば「合う」と感じられるのか、その状況や質的感覚について子ども達と探究しようと考えた。

輪唱を和声的な意味で「合う」と感じるには、自分が歌っている旋律の横の流れに

加えて、同時に鳴っているⅠ度、Ⅴ度などの和音の構造を聴くことが必要である。また、輪唱とは本来、自分のパートの音高が崩れないように意識しつつ、同時に聴こえてくる相手のパートの音高も瞬時に聞き取って合っているかどうかを感じながら歌うことが求められる高度な感覚を必要とする。そこで、二年生の段階では、歌うことだけでなく、鉄琴による和音伴奏という「旋律に調和させる側」も同時に経験させ、以下のような「合う」にせまる学習の流れを提案する。

指導にあたっては、まず曲想に合った歌い方で歌うこと、鉄琴で友達と協力して和音を出す時のタイミングや強さを合わせること等の「合う」ことを引き出した上で、声による旋律と鉄琴による和音伴奏が合うことについて考えさせる。次に、「はるのおがわ」も歌うことができるようになった時点で「はるのまきば」用に演奏していた和音伴奏に合わせることで、元々知っている歌が同じ和音伴奏にも合うのかどうかを試させ、合う／合わないことに関する確信や揺らぎを引き出す。そして最後に、異なる2つの歌を同時に歌う混沌とした感覚から、合う／合わないに関する感覚を臆気ながらも形成していく道筋を子ども達と辿るという流れである。

(2)本題材の目標

- 様々な「合う」こと（音色、和音の響き）について、それらが生み出すよさや違和感などに関わらせて気付くとともに、思いに合った表現をするために必要な、互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能を身に付ける。【知識及び技能】
- 音色、和音の響きを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや違和感を感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったことの関わりについて考え、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつ。【思考力、判断力、表現力等】
- パートナーソングと和音伴奏、パートナーソングどうし等の中に含まれる「合う」に興味をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に探究の学習活動に取り組む。【学びに向かう力、人間性】

(3)題材の構成 全5時間

本質的な問い「合うってどんな感じ？」	
活動	内容
合う音を見つける／2つの音の重なりを聴く	2つの音が重なる色々な響きの違いを感じ取る
「はるのまきば」に鉄琴で和音をつける	歌と和音伴奏が「合う」ことを感じる
「はるがきた」に同じ和音伴奏に合わせて演奏する／2つの歌を重ねて歌う	【本時】同じ和音伴奏に「はるがきた」は合うか 「はるがきた」と「はるのまきば」は合うか
互いのパートや和音伴奏の重なりを聴き合う	「合う」ことに対する考えをまとめる

(4)本時の目標

- 和音伴奏に合わせて歌ったり、パートナーソングを歌ったりすることを通して、合うことの価値を見つける。

(5)提案問題

和音伴奏に合わせて旋律を歌った上で「合う」ことを問い、パートナーソングを歌ったことは、合うこと・合わないことに注意を向け、音が重なる価値を見つけようとするにつながつたか。

3 授業の実際

題材の導入では、「合うってどんな感じ？」という問いについて、最初に鉄琴を用いて二つの音の組み合わせを試して全員で聴き、合うこと、合わないことを感じを引き出した。ここでは二人で同時に鳴らす際に、鳴らすタイミングを合わせることで、強さを合わせるなどなどの技能的な「合う」ことは単純なようで一回目では難しく、何回か練習することの必要性を子ども達は訴えた。合うこ

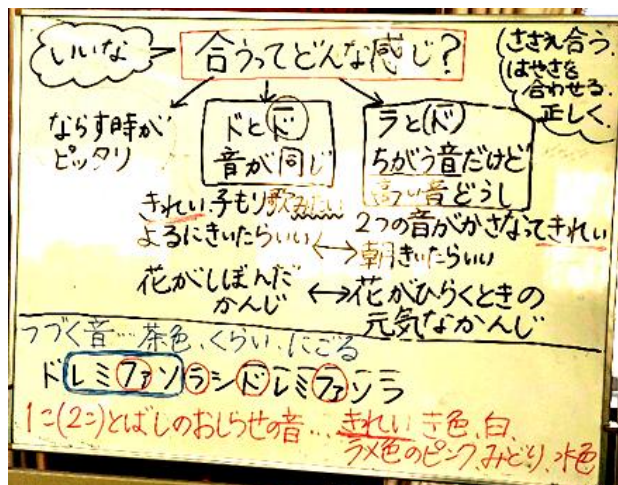


図1 導入の板書

との感じ方については、組み合わせた音の幅が広いと「朝に聴きたくなるような感じで、花がひらくような感じがする。」という感覚が子ども達の中で共有された。次に組み合わせる音の数を四つに増やして確かめる中では、隣に続く音の組み合わせでは「茶色、くらい、にごる」という言葉が引き出され、音の間を一音とばした響きはきれいで「白、ピンク色」などの言葉で表された。

その次の「はるのまきば」に合わせる鉄琴の和音パートでは、四人班で一人一音を担当する形で練習を始めさせた。自分のパートの音とリズムを覚えて演奏する際にも合わせることで自体的に難しさが大きかったが、練習を重ねるうちにできるようになり、自然と歌に合わせて演奏できるようになっていった。

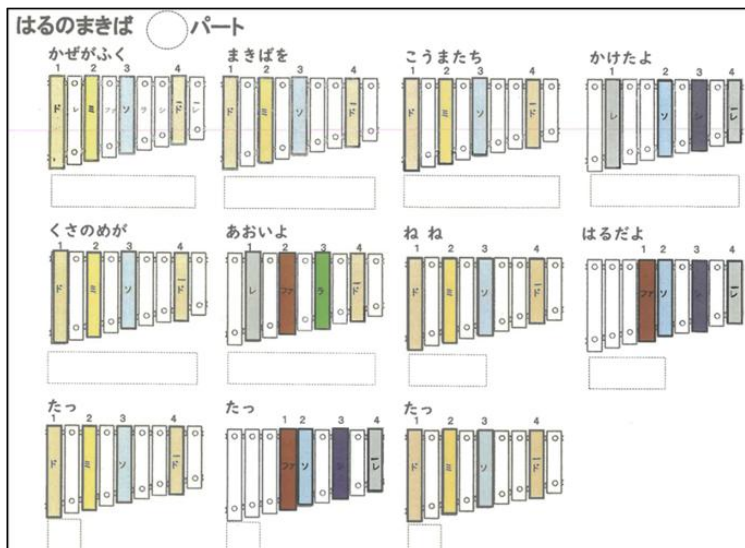


図2 和音伴奏のプリント

歌と鉄琴による和音を合わせて聴きあう中で、歌と和音の関係性にせまるための補助的な発問として、旋律と和音にはそれぞれどんな役割があるかを問うた。子ども達から出た感覚としては、旋律は一人でもよいが和音は音が多いという点に注目し、歌っている旋律が主役で、和音は歌をより楽しくしたり気持ちを和らげたりする役割であるということが共有された。

そして、本時の一つ目の問い『はるのまきば』に合わせていた和音は『はるがきた』に合うか』については、試してみたいというつぶやきを生かして自然発生した意欲を出発点として次の発展した活動に移ることができた。活動の結果、合わないと感じる理由としては、歌のリズムや高さが異なるというのが主であった。合うと感じる理由としては、終わりの長さがちょうど三拍で終わるという点に注目していた。また、部分的に合わないところがあると訴える

子どもがおり、後に判明した

ことであるが、教師のミスにより六つ目の和音（「はるのまきば」の歌詞「あおいよ」の部分であり、「はるのおがわ」の歌詞では「さとにきた」に当たる部分）が通常では4度であるはずが2度の7の和音となっていた部分に気づき（図2を参照）、違和感を抱く人もいたということが共有された。

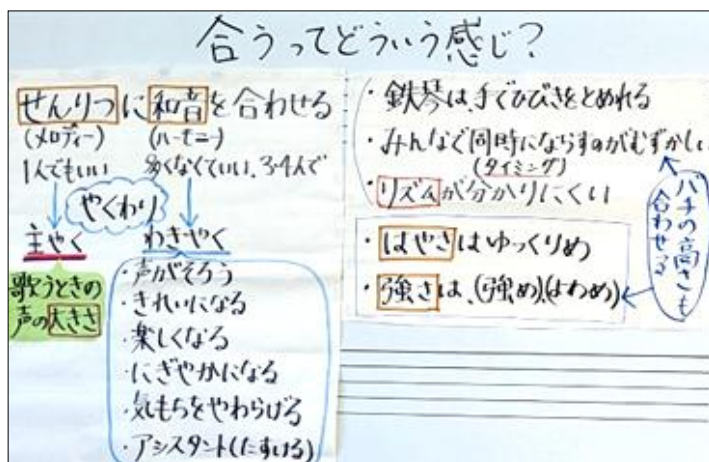


図3 前時までの旋律と和音に関する板書

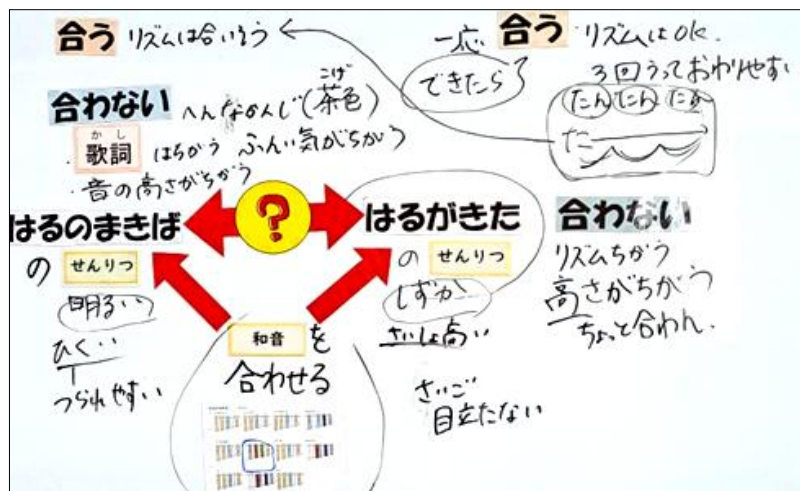


図4 本時の板書

二つ目の発問『はるのまきば』と『はるがきた』を同時に歌うと合うか』については、終わりの部分がどちらも三拍だから合いそうだが、以下の理由で合わないのではないかという予想が多数出た。

- ・歌詞がちがう
- ・歌の雰囲気がちがう（「はるのまきば」は明るい／「はるのおがわ」は静か）
- ・始まりの音が高めと低めでちがう（「はるのまきば」は低い／「はるがきた」は高い）

歌と歌が合うかどうかについては、歌うグループと聴くグループに分かれて検証した。実際に合わせて歌ってみると互いに大声を出すことに必死になるため、鉄琴で和音を四人で練習した時と同様に、互いに同じくらいの強さで歌うこと、速さを合わせる必要があるという以前の学びを生かした意見が出たことにより、子ども達は教師の指揮や強さが均等になるような指示（シーソーのように手で表す）を求めた。

何度か練習をして強さと速さがそろい、つられずに歌えるようになった時点で、改めて合うかどうかを問うと、合うことの理由として最後の部分に着目し、「はるのまきば」は「たったった」と跳ねるが「はるがきた」は「たー」と伸ばすところが違うので互いの声を聴きやすいところがよかったという感じ方が共有された。



4 子ども達の答え「互いが異なることが調和を生む」について

以上のようないくつかの問いを投げかけながら実際に音を出したり歌ったりして確かめて形成された子ども達のオンガク観は、音程もリズムも異なるものを合わせると混沌とするのではないかという認識から、合っていると感じる部分はむしろ大きく異なる部分であり、合うということは互いの音を聴くことができることであるという認識に変容した。また、「はるのおがわ」が「はるのまきば」を支える役割として感じるという考えも出た。以下に、本実践から得た成果を三点挙げる。

一つ目は、合うか合わないかというシンプルな問いによって、子ども達から自然と音楽を形づくっている多様な要素の視点から合う／合わないということの理由に気づいていったことである。一つの題材では限られた要素に重点化して学んでいくことが通例であるが、本実践のように一つの本質的な問いから多様な要素の視点から考えて学びを広げていく学習を実現したという成果があった。

二つ目は、本実践で扱ったパートナーソングを子ども達が他の歌唱経験と比較し、

さらなる学びにつなげようとした点である。後日、改めて行った振り返りの時間では以下のような気づきがさらに共有された。

- ・「はるのまきば」と「はるのおがわ」を合わせることは、合唱でソプラノパートとアルトパートを合わせるのと同じことだと思う。
- ・「はるのまきば」と「はるのおがわ」と鉄琴を合わせることは、合唱とはちがう。合唱は一つの歌だが、パートナーソングは二つの違う歌として作られている。

三つ目は、実践者の所感として重要であると考えた成果であった。その成果とは、合うか合わないかという音楽科における本質的な問いによって子ども達が導き出した答えが、音楽科の中で完結する答えではなく、我々が生きている人間社会において重要な示唆を含む答えであったということである。異なるものとして作曲された二つの歌を合わせるために必要なことは、異なる個性や価値観を持つ我々人間が同時に同じ社会で生きていくという意味での調和につながるのである。子ども達がパートナーソングを通じて学んだことは、強さや速さ、タイミングを「合わせようとする意識」がまず必要だということであった。そして、絶対に合わないと思った二つの歌が、試してみると音が似ているところよりも「大きく異なる部分」で心地よさを感じたことは、我々人間も同じ社会で生きていこうとする意識が必要であり、異なるからこそ互いに支え合えることに置き換えられる。また、大きく異なる部分で「よく相手のパートの声が聴こえるから」合っていることは、調和が互いの主張をよく聴くことによって実現されるということを意味する。その前提として、自分が担当する歌を自信をもってのびのび歌うことも必要であった。音楽科における本質的な問いは、我々が日々向き合っている社会的課題にも通じるものとして「教えずとも」、我々にとって大切なことだったのではないかという余韻を残した。

本時の後、教師による和音のミスは子どもに伝えた。それを見抜く感性とともに、正解として与えられたものに対して臆することなく表現できた子ども達を称えたことも含め、本実践の報告とする。

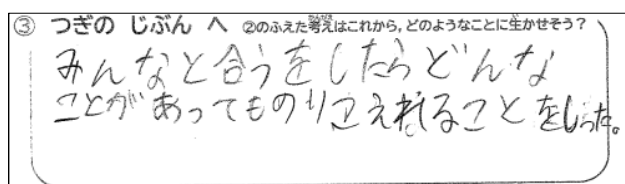


図5 子どもヒロガタルシート

引用・参考文献

- ・後藤田純生『パートナー・ソングを楽しもう① パート練習が必要でない合唱体験を』音楽之友社，2002
- ・富澤裕『たのしいパートナーソング』教育芸術社，2001
- ・教育芸術社『小学生の音楽2』2024